

SCT-B の評定について

小林 哲郎

はじめに

SCT-Bとは文章完成法 (Sentence Completion Test, 略してSCTといわれる) を応用した心理検査である。SCTは未完成の文章を刺激として呈示し、その刺激から連想される内容を記述してもらい、文章を完成させるという形式の投射法検査である。この検査は歴史的には言語連想検査から派生し、当初は知能を測定する目的で用いられていたが、しだいにパーソナリティ・テストとして用いられるようになった。しかし、SCTは言語刺激を用いており、ロールシャッハ・テスト⁽¹⁾のような視覚に訴える刺激に比べると、情動面に働きかける力が弱く、他の投射法検査より意識レベルに近い内容が投射されるといわれている。

ところで、SCT-BはこのSCTの性質を踏まえた上で、被検者の対象や状況の二面性の認知を測定する目的で考案されたものである。現在用いられているSCT-Bは25項目の未完成の文章で構成されているが、前半は今までのSCTと同じである。しかし、SCT-Bでは紙をめくると各文章に続いて「が」という言葉が呈示され、その「が」に続けてもう一つ文章を作るよう教示されるのである(図1)。

このSCT-Bでは、前半部では肯定的な内容であったのに「が」の後では否定的であったり、前半部では否定的であったのに後半部では受容したりという様にいくつかの反応パターンがあることがわかった。SCT-Bは、SCTの応用であ

るため記述内容から被検者の心理的、環境的状况も把握できるし、生活史を理解する情報も多いことはもちろんであるが、「が」の前後の反応パターンによって被検者のパーソナリティを理解する検査としての側面を持っているのである。

本論文では、SCT-Bを考案するに至った経過と反応パターンとして考えられるものの説明及びデータから推察されるパターンの意味等を検討し、SCT-Bの基本的性格を明らかにすると共に、今後のSCT-B研究の可能性を展望してみたい。

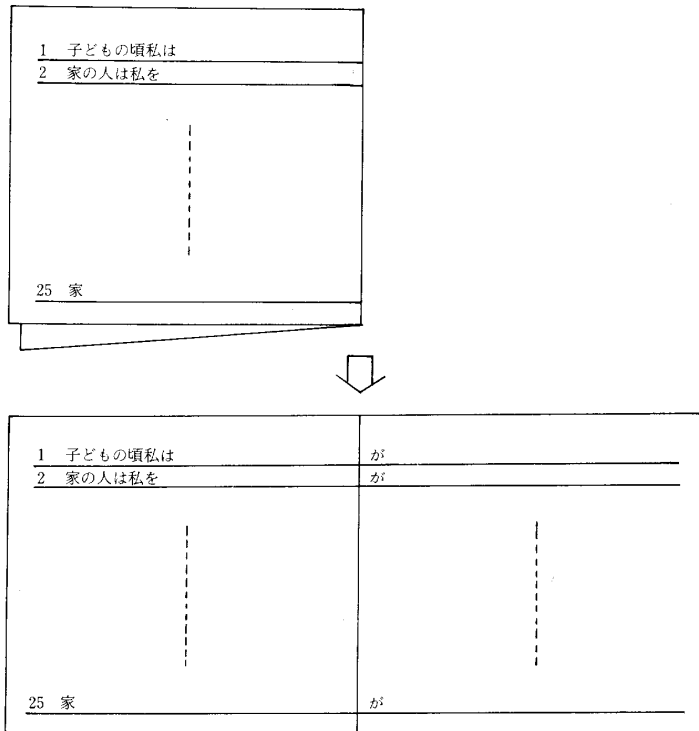


図1. SCT-B の体裁

1. SCT-Bに至るまで

権威主義的人格の研究⁽²⁾を行なった研究者の一人である Frenkel-Brunswik (1948) は人種的偏見の強い人たちへのインタビューを通じて、彼らが性役割, 親子関係, 対人関係において, 強いか弱いか, 良いか悪いかというような固い⁽³⁾ カテゴリー化を行なうことに気付き, その傾向が認知的側面に反映されたものを Ambiguity Tolerance (あいまいさに対する寛容性, 以下 AT と略記) と呼んだのである。即ち, AT の低い人は同じ対象の肯定面と否定面, 両面の現実的共存が認知できないのではないかということである。

筆者は, この AT を測定する目的で SCT-MR というテストを考案した(小林 1984)。このテストは精研式文章完成法の中から「私の父」「私の母」「男」「女」「私は人々」という刺激語が, それぞれ繰り返し 4 回出現するように構成されており, それぞれの繰り返し語の中で肯定的記述と否定的記述の両方が見られたかが評定された。この SCT-MR は, 同じ刺激語が繰り返し出現する状況で, 肯定, 否定の両面的認知ができる人は, それを表現するのではないかという意図で作られたものである。しかし, AT を測定する質問紙の MAT-50 (小林 1980) と SCT-MR での肯定, 否定の両面的認知の指標とは相関がなかった。このことは, SCT-MR の構造的規定力の問題も考えなくてはならないが, Water-Jar⁽⁴⁾ テストと負相関があったことから Water-Jar で思考の構えがくずれない固さをもっている人は, 繰り返し語で反応を変えてもいいという教示を厳格に理解し, 変えなくてはならないというふうに解釈したのではないかとも考えられる。いずれにしろ, AT を SCT を利用して測定するには, 形式にしろ, 教示にしろ統制すべき要因が数多くあることがわかった。

この時点で, 筆者は SCT を用いて AT を測定するという方向から少しはずれ, 全般的な対象や状況についての二面性の認知を SCT を用いて測定することができないかということに関心をもつようになった。そしてまず考えたのが, SCT-BUT というテストである。このテストは精研

式文章完成法の各刺激語の下にもう一行くを設けてその先頭に「が」という語をつけ加えたものである(図2)。この SCT-BUT で刺激語に続いて改行して「が」をつけたのは, 「が」という逆接の接続助詞の機能を持つ語を用いてもう

1	子どもの頃私は	_____
	が	_____
2	私はよく人から	_____
	が	_____

30	私が思い出すのは	_____
	が	_____

図2. SCT-BUT の体裁

一つ文章を作る, 即ち, 文法的に言えば重文を作るという作業を課すためである。その意図は, 最初の行で刺激語に続けた文章の内容とは逆の内容, あるいは, 刺激語に関する他の観点等を引き出すためのものである。このような形態にすることによって, SCT-MR よりは二面性を引き出すための構造的規定力を強くすることができるのである。この SCT-BUT を施行してみると肯定, 否定の両面を表現する反応 (ex 「私の父 はやさしい が こわい」) とか例外を示すもの (ex 「私の母 はやさしい が ヒステリーを起す時はこわい」) 等の予期された反応を数多く見出すことができた。しかし, SCT-BUT は, 最初から「が」を呈示しているために「が」を格助詞として使用する反応 (ex 「私の父 のやさしさ が 好きだ」) がふえるという欠点が生じた。また, それにひきずられて自己の心理的・環境的状况を投射しない創作的反応 (ex 「男 は朝起きる時 が 一番つらかった」) も数多く見出されることがわかった。それらの反応を含めて分析してみるとということも考えられるが, 辻 (1978) が指摘するように「SCT は文脈を完成させるという構造をもつことによって, 被検者

に『何を感じているか、思っているか、考えているか』を述べることを規定することができ、しかも『何を』を自由に開けておくことができる」ことに特徴があるのであり、「が」の格助詞としての使用や創作的反応が多すぎることは問題であろう。

このような SCT-BUT の欠点をカバーするために考案したのが SCT-B である。SCT-B は図 1 に示したように、最初は今までの SCT と同じように、一つの刺激語に対して文章を完成するという形で自由な記述を求めるのであり、そこまでの反応は SCT と同じである。次に折り込んだ紙を広げると、「が」が呈示される。そこでは、自由に記述した反応自身が後半の反応を規定する刺激の性格を持つという新たな状況が生じるのである。そして、「が」は逆接の接続助詞として文脈上に位置づけられ、後半部では前半部に述べたことと逆の内容を、少なくとも異なる側面を述べねばならないという構造的規定力を持つことになるのである。

2. SCT-B の実施法

ここで現在筆者が使用している SCT-B について説明しておく。

i) 項目

SCT-B では施行時間の都合上、精研式文章完成法の刺激語の中から25の刺激語を選んだ（表 1 参照）。精研式文章完成法では、内容の分析を身体、家庭、社会の3領域に分類しているので各領域に関係の深い刺激語を中心にしている。刺激語の数は多くて30ぐらいが適当であろう。なぜなら、集団施行の時早く反応を書き終える人と書き終えるのに時間がかかる人の差が大きくなりすぎると、テスト状況のコントロールが難しくなってくるからである。

ii) 実施法・教示

実施法は集団でも個人でも実施できる。

最初の教示は「ここにある言葉を見て思い浮かんだことを、それぞれの言葉に続けて文章にしてください。時間制限はありませんが、順番に余り考えないで思いつくものをできるだけ早く文章にしてください。できた人は鉛筆をおいて

表紙をとじて待つてください。」というように行なう。そして挙手等で全員が終了したことを確かめた上で（経験上、20分～30分はかかる）「が」を印刷した面を広げさせて次の様な教示をする「右に『が』という助詞があります。今作った文章にこの『が』をつけてもう一つ文章を考え、全体が一つの文章になるようにして下さい。思いつかないものはとばして行って結構です。順番に思いつくことを書いてください。ただし、前の文章を変えたり、手を加えないでください。」大体このような内容を伝えればよい。後半も20～30分の時間はかかるが、後半はとばしていいことになっているので、反応を少しだけしか書かない被検者から25項目すべてに反応する人までいろいろであり、所要時間の個人差は広がることを考慮に入れる必要がある。

iii) 反応数分布

反応数の分布は、武庫川女子短大の116名の平均は、18.92、標準偏差4.81であった。（図3）。金沢美術工芸大学のデータ（101名、男子54名女子47名）の平均は18.60、標準偏差5.26であるからほとんど同じくらいの反応数が得られると考えてさしつかえないだろう（反応数は後半反応数）。図3をみてもわかる通り、多くの被検者は15以上の反応をすると考えていいだろう。ただし、被検者集団や検査状況によって反応数が変わることも考えておかねばならない。

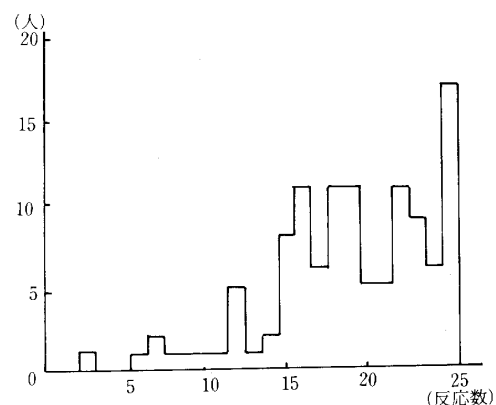


図3. 反応数分布

3. SCT-B の反応パターン

パターンを分類する基準は様々に設定することができる。筆者は、「が」を用いて二面性の認知の記述を引き出そうと意図したので、当然二面性、特に対象や状況の肯定面、否定面両面の認知という反応に注目して分類することになる。

i) パターンの分類

①肯定・否定

前半で肯定（否定）的感情を述べ、後半で否定（肯定）的感情を述べるパターン。

ex.) 私の父 はやさしい が こわい

②肯定・肯定

前半でも後半でも肯定的感情を述べるパターン。

ex.) 私の母 はやさしい が やはり好きです

③否定・否定

前半でも後半でも否定的感情を述べるパターン。

ex.) 死 ぬのはいやだ が 考えたくもない

④例外

前半で肯定（否定）しておいて後半で例外的な否定（肯定）面を述べるパターン。このパターンにはいくつかのバリエーションがある。たとえば後半で「……でないものもある」というように前半で肯定（否定）した事物や事象について逆の部分もあるという指摘のこともあるし「……なると問題である」というように限定されたある状態になると問題が生じるというような表現もこのパターンと考えられる。

ex.) 友だち は好きだ が 嫌な奴もいる

ex.) 恋愛 はいい事だ が 熱中しすぎると問題である

⑤受容

前半では否定的感情を述べるが、後半ではそれを受容するパターン。

ex.) 死 ぬのは嫌だ が 仕方がないことだ

⑥拒絶

前半では受容したものの後半で否定的感情を述べるパターン。

ex.) 死 ぬのは仕方ない が やはり嫌だ

⑦理想・現実

前半で理想、願望、原則等を述べ、後半では実際の状況、現実的問題等を述べるパターン。

ex.) 恋愛 はしたい が 相手がいない

⑧期待・不安

前半で将来への期待、希望を述べ、後半ではそのことについての不安を述べるパターン。

ex.) 将来 結婚したい が 大丈夫だろうか

⑨過去・現在

前半、後半で過去と現在の違いについて述べているもの。ただし英文法でいうような大過去と過去の関係の中で違いに言及しているものもこのパターンに入れる。

ex.) 子どもの頃 私は 明るかった が 今は暗くなってしまった

⑩希望

前半で述べた内容に関して後半で希望、願望を述べるパターン。

ex.) 私の頭脳 はふつうである が よくなりたい

⑪不安

前半で述べた内容に関して後半で不安を表明するパターン。

ex.) 私の健康 はふつうだ が ガンにならないだろうか

⑫決意

前半で述べた内容に関して後半で決意や努力を表明するパターン。

ex.) 仕事 は遅い が 早くなるように頑張ろう

⑬自己

前半で述べた内容に関して後半で自分に関係づけるパターン。

ex.) 私が嫌いなのは うそをつく人 が 私もついている

⑭説明

前半で述べた内容に関して後半で説明したり気持ちを述べたりするパターン。

ex.) 私の兄弟 は兄が一人いる が 遠くで下宿している

以上のような14種類のパターン⁽⁵⁾を考えており、分類不能なものは「その他」とした（意味

の通じない反応と「が」を格助詞として用いている反応については「疑問反応」として別に取り扱うことにする)。これらの反応パターン分類のカテゴリーは武庫川女子短大と金沢美術工芸大学の学生約200名のデータをもとにしたものであるから、被検者が変わったり、刺激語を変えれば、より適切なカテゴリーを想定した方がよくなることも考えられる。そこで金沢美術工芸大学で用いられたSCT-B(武庫川女子短大では「家」が「家では」,「学校」が「学校では」になっていた)をSCT-B(K-85)というふうに命名し、この分類法はK-85版での分類法という呼称を用いることにしておく。

さて、ここでこのK-85版での分類法についてもう少し説明を加える。全体の関係を把握するために大きく2つに分けて前半、後半両方の内容を問題にするものと後半の内容を中心に分類基準を設けたものを考えると、両方の内容を問題とするのは「肯定・否定」「肯定・肯定」「否定・否定」「理想・現実」「期待・不安」「過去・現在」「例外」「受容」「拒絶」のパターンであり、後半部の内容を中心に分類するのが「希望」「不安」「決意」「自己」「説明」の各パターンである。評定の時には前者のグループを優先させ、例えば「私の母 はやさしい が 怒るとこわい」であれば「説明」ではなく「肯定・否定」にする。そして、どうしても2つのパターンの要素をもつと思われるものは組み合わせ評定として2つの反応パターンに0.5点ずつ評定する(例えば「家の人 は私を 信じて大学に入れてくれたが 僕は期待に答えられるだろうか」という反応は「自己」+「不安」とする)。しかし、組み合わせ評定は余り多用しない方がいい。なぜなら実際の反応は微妙な表現が多いので多用すると組み合わせ評定ばかりになりかねないからである。ただし、前半で肯定、否定の両面的感情を述べて後半にも何かの反応がある時は組み合わせ評定をする(例えば「私の父 は無口だが尊敬する が もう少し話してほしい」であれば「肯定・否定」+「希望」とする。ただし後半に反応がないものは後半無反応に分類する)。この扱いは、肯定、否定両面的認知の測定という

テスト作成の意図を尊重して行なわれるものであるから、他の反応では用いることはできない。例えば前半で不安を表明していても「不安」はつけてはいけないのである。

次に肯定的、否定的感情が含まれるが否かという点から反応パターンを分類してみる。「肯定・否定」「肯定・肯定」「否定・否定」の3パターンは当然であるが「例外」も「肯定・否定」に近く、肯定(否定)的感情を含んだ反応パターンである。ここで肯定(否定)的感情といっても客観的に評定することは難しく、例えば「厳しい」のが否定的かどうかは判断しにくいのである。しかし「やさしい が 厳しい」という文脈上であれば、「肯定・否定」としてよいと筆者は考えている。

また、前半後半両方の反応内容を問題とするパターンの内、「過去・現在」は事実の違いを述べる場合もあるが、肯定的雰囲気をもつ「+」否定的雰囲気をもつ「-」として図式化すると「理想・現実」「期待・不安」「拒絶」は「+・-」、「受容」は「-・+」という関係になる。これらのパターンでは否定的感情を含む場合(「受容」の前半部、「拒絶」の後半部)もあるが、肯定(否定)的雰囲気といった方がいいような消極的肯定(否定)が多い。

後半の内容を問題とするパターンでは、「説明」「希望」は反応によっては肯定(否定)的感情を含むことがあるが、ほとんどが消極的肯定(否定)である。

ここでもう一度肯定(否定)的感情とする基準を説明しておく。まず、その感情が刺激語に向けられたものであるということは大前提であるが、先程も触れたように文脈を手掛りとすることが大切である。例えば「私のからだ は太っている が しかたない」(「受容」反応)と「私のからだ は太っている が やせてる人が可哀想」(「説明」反応)では太っていることへの感情が違っているのである。こういう場合、文脈上でもわかりにくいものは深読みをせず事実の記述としなければならない。

また、「好き」「嫌い」という直接的表現でなくとも「友だちはたくさんほしい」「恋愛は一度

はしてみたい」という希望、願望とか「金は不可欠なもの」という必要性とか「私の父はかわいそうだ」という同情等も肯定的感情とし、その逆の表現であれば否定的感情としなければならない。また、「私が好きなのは」等の肯定的または否定的感情が刺激語に含まれている項目は、前半の内容に後半部でどう反応するかによって反応を分類するのであり、「私が好きなのは 食べることです が 寝ることも好きです」という反応は「肯定・肯定」ではなく「説明」とする。逆に「私が好きなのは 食べることです が それ以外に楽しみはありません」であれば「肯定・肯定」としなくてはならない。

評定上気をつけることとして「肯定・否定」と「例外」の区別についても言及しておく。「私の母 はやさしい が 怖い面もある」という反応は母の全体像の中に否定的部分があるので「例外」と評定できそうであるが、一つの対象の二面について述べているから「肯定・否定」である。「例外」は複数の対象の中の一部に言及する場合（「友人 はたくさんほしい が いいかげんな奴は嫌だ」）とか、一つの対象でも時間的、空間的に限局された場合（「私の父 はいい人だ が 酒を飲むとだらしない」）に評定するものである。

また、「自己」という評定は、後半で自分のことに言及する場合であるが、「自分は～だ（だろうか）」という反応が中心である。「私の兄弟 は気がつい が 私は好きだ」という反応は、「私は」が入っているので「肯定・否定」+「自己」でいいが、「私を不安にするのは 友人とのトラブル が 自分で解決するしかない」であれば「決意」とし「自己」にしてはいけない。

その他にも評定上留意すべき点はまだあるが、ここではこの程度に止めておいて、次の各項目と反応パターンとの関係を検討することにする。

SCT-B (K-85) の各項目と反応パターン評定の関係をまとめると表1のようになる（金沢美術工芸大学の学生83名、男子47名女子36名のデータ）。用いたパターンに1点、組み合わせ評定には0.5点ずつを評点し合計したものだが、後半無反応数、疑問反応数、その他を除いて出現

頻度をみると、「説明」のように16.3%のものから「拒絶」のように0.3%のものまで様々である。「拒絶」「肯定・肯定」等は出現頻度は少ないが、分類上省略できないと考えている。

各反応パターンがどの項目で出現しやすいかを検討してみると「肯定・否定」は「私の父」「私の母」で多いが、これは父母が感情的なものを投射しやすく二面的にも認知しやすい対象であることを示している。また、「金」の項目での「理想、現実」とか「私を不安にするのは」での「受容」もよく使われるパターンだが、これらの項目には他にも多いパターンがある。しかし、「期待、不安」パターンの「将来」の項目、「過去・現在」パターンの「子どもの頃私は」の項目、「肯定・肯定」パターンの「私の母」の項目のように、その反応パターンの半分以上が1つの項目に集中しているものがある。これらは、ロールシャッハ・テストでいうポピュラー反応のように特定の項目に特別に出現しやすい反応パターンである。

このデータにはその他にも言及したい点が多いが、もっとデータ数をふやした上でもう一度検討することにして、次にこのSCT-Bの今後を展望してみたいと思う。

4. 今後の展望

今まではSCT-B(K-85)に至るまでの経緯と評定について述べてきたが、ここでは、SCT-Bの筆者なりの位置づけを明らかにしながらこのテストをどのように発展させたらいいかを考察していくことにする。

まず、このテストと評定法はまだ試行段階であり項目の選定、反応パターンについては、筆者自身も何度か修正を加えながら一応現在のSCT-B(K-85)という形を定めたものであることを確認しておかねばならないだろう。したがってSCT-B(K-85)という形でのデータは100ぐらいしかない。しかし、このテストの考案に至るまでの経緯から筆者は反応パターンの評定が極端に妥当性を欠くとは思えないし、項目数や選定も妥当であると思っているのでこのような形でまとめ発表しているわけである。ただし、

表1. SCT-Bの各項目と反応パターン評定

	肯定 否定	肯定	否定 否定	例 外	受 容	拒 絶	理 想 現 実	期 待 不 安	過 現 去 在	希 望	不 安	決 意	自 己	説 明	そ の 他	反 後 応 半 数 無	反 疑 応 向 数
1 子どもの頃私は	9		2	5	3				30					32		2	
2 家の人は私を	10	1		9	7		1		4		28	12	18	18		12	
3 私が嫌いなのは	1		4.5	9	7.5	4	3			1		2.5	20	17.5		16	1
4 死	5		2.5	2	11	1	5	2	1	7.5	4	2.5	1	22.5		9	4
5 私の頭脳	7		2	16	5		2	1		5	1	1		22		20	
6 将来			1		5	1	12	22		13	4	9		6		11	
7 私の父	20.5	1	3	16	5		2		1	4			4.5	18		7	
8 世の中	8.5		1	5	10.5		5	1		3.5	1	4.5	11	21	1	10	
9 仕事	8.5			12	3.5		16	4		5	1.5	7		13.5		11	1
10 私のからだ	5		1	13	14		1			10		7		18		14	
11 私の兄弟(姉妹)	9.5	1	2.5	12	2		3		1	5	1		4	25	1	15	1
12 女	14.5		1	13	14.5		3			6	1	1		15	1	12	1
13 友だち	4		1	15.5	2		12			5.5	1	2	3	24		13	
14 私の母	24.5	11		15	3	1				2			1	13.5	1	11	
15 争い	1		3	15.5	12	1.5	17			4		3	1	7	1	15	2
16 私が好きなのは	2	1		10			21			2	2		1	18	3	21	2
17 男	4.5			15	2		7.5	1		1		1	2.5	25.5	2	20	1
18 恋愛	7.5		1	16			18	2		7.5	1	1	3	13		13	
19 学校	7.5			15	10		15		1	4	1	6	2	12.5		9	
20 私が得意になるのは	4			11			21			1	1	6		15		20	4
21 金	7.5	2		5	2		34			7.5	1	2	1	10	1	10	
22 私の健康		1		14	7		10			7	5	2		20	1	16	
23 女・男(異性の)友だち	4.5		19	2		17			8			1	13.5			16	2
24 私を不安にするのは	3		1	4	20.5		5		1	4	2	8.5	1	11		18	4
25 家	7			4	1		16	3		3		1	0.5	28.5		19	
計	175.5	18	26.5	271	149.5	8.5	246.5	36	39	116.5	29.5	68	75.5	440	12	340	23
出現頻度(%)	6.5	0.7	1.0	10.0	5.5	0.3	9.1	1.3	1.4	4.3	1.1	2.5	2.8	16.3	0.4	12.6	0.9

評定の信頼性の検討はまだ行っていないので、評定者間の信頼性係数等の検討は今後の課題としておくことにする。

さて、このテストはATの低い人は対象の肯定否定、両面の認知ができないという考えを根拠にして考えられたものであるが、筆者は、今後はATということにこだわらずに対象や状況の二面性の認知を中心にダイナミックにパーソナリティを測定するテストとして発展させていこうと思っている。なぜならATと「肯定・否定」パターンが単純に相関するとは限らないと思うからである。というのはATの高い人は確

かに何事にも肯定、否定面があることはわかっているのだが、それをこのようなテスト(特に作業量の多いテスト)には表わさない傾向があるからである。ATの高い人は細かいことにこだわらず適応的ではあるが、その分テストに非協力的であったり、教示通り厳密にテストに取り組むことが苦手のようなのである。ATの高い人の二面性の認知は、そのATの高さ故にテストに反映されにくい、ということができよう。このことはAT研究における課題でもあるが、以上のような理由で、AT概念にこだわらずに全般的な状況の二面性の認知を中心とするダイナミ

いえるかどうかは疑問であり、正確には二面性の認知を測定する側面もあるといわねばならないだろう)。

また、ユングのいう意識と無意識の相補性という人格の機能に関連させて考えれば、SCTは言語を用いて反応するために前半は意識レベルでの被検者の心理的、環境的状况を投射するが、「が」という逆説の接続助詞によって逆のことや他の側面の記述を求めるといふテスト状況は、意識レベルでも、より無意識に近いものをひき出す規定力を持っており、時には無意識内容を色濃く反映した反応になるかもしれない。これは、あくまで可能性であり今後検討すべきことであるが、興味深い問題である。

さて、このSCT-Bは二面性の測定ができるだけでなく、反応パターンの分析によってパーソナリティ・テストとして使用することができる。各反応パターンの量的分析、どの項目にどのパターンを用いたかというような分析によってロールシャッハ・テストの形式分析のような分析ができるかもしれないと考えている。ここでは余りくわしくはふれないが、人格の二面性スケールの各形容詞の評定とSCT-Bの反応パターンのスコアの関連をみると、「肯定・否定」は「孤独を好む」「勇猛な」「大胆」「クール」「臨機応変の」等と相関があり、バイタリティがあると共に冷静なタイプであるとか、「決意」の多い人は一本気で激しやすいとか、「受容」の多い人は付和雷同であるというような傾向等が示唆された。各反応パターンとパーソナリティの関係は今後の中心課題であり、この関係を明確にして初めてSCT-Bをパーソナリティ・テストとして使用することができるといえよう。

最後にこのテストの意義について述べてみたい。SCTそのものは被検者の意識レベルでの心理的、環境的状况を理解するのに役立つので、学校、病院、相談所等で用いられている。しかし内容を量的に評定することが難しいために、他のテストと併用することによって初めて意味をもつという扱いをされることが多いようである。ところが、SCT-Bはパターンという形に置き換えられてはいるが、ある程度量的評定を容

易にしており、いわばパーソナリティ・テストとSCTの両者の機能を合わせ持っているといえよう。

筆者は最初、対象の二面的認知の測定を目的としていたのであるが、結果としてSCTにパーソナリティ・テストの機能を加えることになり、またユングの対極性の共存の考えとの関連性も展望の視野の中に入ってきたのである。しかし、新しいものは古いものの良い面を殺してしまうという危険性もあり、項目数を限定せざるを得ないというのもその一つであろう。項目数を減らすというデメリット以上のものをSCT-Bが提供するかどうかについては、今後の検討を待たねばならないだろう。

いずれにしても、SCT-Bはこれからのデータの蓄積と分析によって発展していくテストである。本論文で考察したように様々な可能性を秘めたテストであるので、評定法の充実を中心に今後も研究を続けていきたい。

注

- (1) スイスの精神科医ロールシャッハが考案した投射法によるパーソナリティ・テスト。インクのしみのような漠然とした左右対称の図版10枚を呈示し、どこが何に見えるかを問う形式である。
- (2) この研究は第2次世界大戦でのナチスのユダヤ人迫害を直接的契機として、人種的偏見の心理を明らかにするため、アメリカのユダヤ人協会の後援で行われたものである。
- (3) rigidityには硬さという字をあてることが多いが、筆者は固さという字をあてる。
- (4) 一定の量の水を得るために数種類の容量の異なる椀で水を出し入れするという状況を数値的操作に置き換えたテスト。最初の数試行で作られた思考の構えが、より簡単な操作でも解決できる試行の際に崩せるか否かを評点するもの。固さを測定するテストとして使われる。
- (5) 小林哲郎・森知子(1984)等では「並列」「転換」の2つパターンも考えていたが、出現数、分類の難しさ、パターンの有用性の点から削除し、「説明」の中に加えることにした。
- (6) 意味微分法ともいわれる、オズグッドの考えたイメージ測定法。反対の意味をもついくつかの形容詞対尺度上に特定の対象についてのイメージを評定させて

いく形式のテスト。

(7)この二面性スコアは算出方法が手直しされている。

(森 知子 1984 人格の二面性スコアについて

(8)日本教育心理学会第26回総会発表論文集
358-359)

参 考 文 献

- Frenkel-Brunswik, E. 1948 Tolerance toward ambiguity as a personality variable. American Psychologist, Vol 13, 268.
- 河合隼雄 1983 人格論における対極性(「精神の科学2 パーソナリティ」 岩波書店 278-307)
- 小林哲郎 1980 Ambiguity Tolerance 質問紙 MAT-50について—日本での信頼性, 妥当性の検討— 日本心理学会第44回大会発表論文集 501
- 小林哲郎 1984 Ambiguity Tolerance 研究の展望 京都大学教育学部紀要 297-308
- 小林哲郎・森 知子 1984 SCT-Bと人格の二面性スケールについて 日本心理学会第48回大会発表論文集 506
- 森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究 第54巻 183-188
- 佐野勝男・楨田 仁 1961 精研式文章完成法テスト解説 金子書房
- 辻 悟 1978 心理学的検査(「現代精神医学大系4 A 1 精神科診断学 I a」 中山書店 177-293)

(本学講師・心理学)

[昭和59年12月20日受理]